

平成三十年度冬季

全国大学国語国文学会 第一一八回大会案内・要旨集

期日 一二月一日（土）・二日（日）

会場

明治大学（駿河台キャンパス）リバティータワー・二階（二日目）

明治大学（駿河台キャンパス）リバティータワー・七階（二日目）

JR中央線（総武線）・御茶ノ水駅下車、御茶ノ水橋口改札より徒歩5分

地下鉄千代田線・新御茶ノ水駅下車、B3b番出口より徒歩5分

地下鉄・半蔵門線、都営新宿線「神保町」下車、A5番出口より徒歩5分

平成三十年度冬季

全国大学国語国文学会

第一一八回大会ご案内

○同封の葉書に出欠を記入の上、一月一七日（土）までに必ず到着するよう（返送下さい。）
○欠席の場合も必ず（返送をお願いいたします。）

○一二月一日（土）の、昼食代（一、〇〇〇円／委員のみ）、懇親会費（一般・八、〇〇〇円、大学院生・五、〇〇〇円）、一二月二日のレジュメ資料代（一、〇〇〇円）、昼食代（一、〇〇〇円）は、同封の郵便振替用紙（口座名称／全国大学国語国文学会 第一八回大会、口座番号／〇〇一四〇一七一七九二一八〇）にて一月一六日（金）までにお振り込み下さい。

○会員の方々へ要旨集ができるだけ早くお届けするために、司会者のお名前は入れてありません。レジュメ資料集には司会者のお名前も入ります。事前に出張依頼状が必要な方、または大会についてのお問い合わせは、左記の事務局まで（連絡ください）。

早稲田大学 教育学部 石原千秋研究室
全国大学国語国文学会事務局・一八回大会担当
Eメール zenkokudaigaku.waseda2017@gmail.com

第一回 一二月一日（土）

常任委員会（11時00分～11時30分） リバティータワー 16階 1164教室
委員会（11時30分～12時00分） リバティータワー 16階 1164教室／控え室・16階 1166教室

公開シンポジウム（13時00分～17時00分）
受付 12時30分～
開会 13時00分～

会場 リバティータワー【2階1021教室】

開会の辞

会長挨拶

会場校挨拶

総合司会／獨協大学特任教授 城崎 陽子
本学会会長／京都市立芸術大学名誉教授 中西 進
明治大学文学部教授 小野 正弘

テーマ「物語が不可能になつた時代の中で」

今日、物語を作るAI（人工知能）の開発が試みられている。人間の知能を模倣するAIは、人間らしくあろうとした結果、物語を作れる能力を手中に收めようとする。物語を作ることは人間の知的営みの基底にある。長らく人文科学のテーマとなってきた人間とは何かという問いは、いまや科学技術こそが明らかにすべき問いとなつてしまつた。

振り返つてみれば、人文科学の領域において、構造主義以降の知的展開で俎上に載せられたのは物語であつた。レビュイ＝ストロースは「野生の思考」によつて西洋中心主義の知の枠組みを相対化したが、その際には神話が分析対象となつた。さらに神話や昔話の構造は、プロップやトドロフ、グレマス、バルトといった多数の論者によつて理論化された。ジエラール・ジュネット『物語のディスクール』を始めとして物語の表現形式に注目した語りの分析（ナラトロジー）も盛んに行われた。これらの研究は日本文学研究にも大きな影響を与え、80年代半ば以降の語り論やテクスト論の隆盛をもたらした。

この知の展開は歴史学にも広がり、ヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』は大きな反響を呼んだ。極論すれば、歴史が引喻・換喻・提喻・アイロニーという四つのレトリックに還元されてしまつたからである。歴史の根拠は物語によつて揺さぶりをかけられ、そのインパクトは「歴史修正主義」をめぐる議論や実証主義の復権といつた問題となつて今日まで続いている。これは、歴史と物語という二項対立が脱構築されて「歴史は物語である」という言明が現れた結果、その言明への違和感と否定が浮上したという事態ではないか。この違和感は、さらに事実と虚構という二項対立を脱構築したときに明らかになるだろう。「すべてが虚構である」という言明が否定されるなら、虚構は事実とどのように関係づけられるのか。あるいは、「大きな物語の終焉」の後、どのような物語が力を持つのか。いま量子物理学の分野では宇宙の複数性が論点となつてゐる。もし宇宙が複数あるならば、「いま・ここ」にある私たちの生もこの世界も偶然あるにすぎないことになる。そう考えれば、「すべてが虚構である」という言明が否か是かという問い合わせが無化されるだろうし、〈はじめ〉と〈終わり〉を因果関係で意味づける物語の出番はない。一方で、事物はたしかに実在し、それは数理的にしか記述できないとする哲学的実在論や科学的自然主義も注目され始めてゐる。そこにはもう「大きな物語」はおろか、いかなる物語も生まれる余地さえないように思える。私たちの「知」はもう物語を必要としないのである。

こうして物語に「ノン」が突き付けられたいま、むしろ「物語とはなにか」という問い合わせが切実に見えてくるのではないだろうか。人文学の知は物語をどのように捉えることができるのか、そもそも物語は可能なのかを議論したい。

公開シンポジウム (13時15分～17時00分)

〈神話〉が作る国家—列島古代の精神史—

古典文学における「物語」と「読者」—書写・印刷史を視座として—

泉鏡花が描いた〈物語〉—近代幻想文学と民俗学の交流—

司会／明治大学教授 田中 励儀

早稲田大学教授 松本 直樹
関西学院大学教授 森田 雅也
同志社大学教授 田中 励儀
司会／明治大学教授 生方 智子

懇親会 (17時30分～)

会場 明治大学紫紺館

会費 一般・八、〇〇〇円

大学院生・五、〇〇〇円

第二日目 一二月二日 (日)

A会場 1074教室 (10時00分～15時30分)

(10時00分～11時20分)

異類婚姻譚の翻案と改作—「白娘子永鎮雷峰塔」「蛇性の姪」「蛇淫」をめぐって
『古事記』「秋山・春山の神」神話における母神の靈力

〈休憩〉

(11時35分～12時15分)

『今昔物語集』における孝養思想

〈お昼休み＝休憩室・1075教室〉

(13時15分～14時35分)

源氏物語における「春や昔の春ならぬ」引用—早蕨・手習巻の自然表現—
『源氏物語』「若菜下」巻 腫月夜の最後の手紙

筑波大学大学院生 陳 婉瑜
フエリス女学院大学大学院生 宮澤 千鶴

徳島大学外国人研究員 韓 春紅

明治大学大学院生 関 恭平
國學院大學大学院生 小菅あすか

〈休憩〉

(14時50分～15時30分)

橋守国の絵手本作品における和漢分類意識——レイアウトを起点に——

B会場・1076教室 (10時00～15時30分)

(10時00分～11時20分)

尾崎紅葉の日記・旅行記・闘病記

——『十千万堂日録』と『修善寺行』「病骨録」「病間記」との関連から——
時間、この不思議なるものの文学——中島敦「木乃伊」論——

〈休憩〉

(11時35分～12時15分)

太宰治「走れメロス」論——〈信じる〉ということ——

〈お昼休み〉II 休憩室・1075教室

(13時15分～14時35分)

『仮面の告白』の出版戦略——河出書房と三島由紀夫の関係から——
自我の模索——遠藤周作『沈黙』から見る

〈休憩〉

(14時50分～15時30分)

中上健次『地の果て・至上の時』論

立教新座中学高等学校教諭	明治大学大学院生	尾山	古明地
明治大学大学院生	本橋	眞麻	樹
董	龍晃		
春玲			

東京大学大学院生	峰尾	高橋
	俊彦	茂美

総会・授賞式《B会場・1076教室》(15時45分～16時45分)

総会
研究発表奨励賞授賞式

閉会の辞

明治大学教授 生方 智子

全国大学国語国文学会 第一一八回大会

研究発表会 発表要旨

【研究発表会・A会場】

異類婚姻譚の翻案と改作

—「白娘子永鎮雷峰塔」「蛇性の姪」「蛇淫」をめぐつて

筑波大学大学院生 陳 婉瑜

神話、伝承を起源とする異類婚姻譚は、多くの物語を生み出しどともに、民俗学、社会学、宗教学の立場からも論じられ、それぞれの解釈がなされてきた。異類婚姻譚は、様々な「異類」と人間との婚姻を扱うジャンルであるが、本発表では、「蛇」との婚姻譚を描き出す文学作品を取り上げ、その表象の変遷を考察したい。蛇は四肢を持たない長い体と、時には毒をもつ独特の爬虫類である。

中国の神話・伝承においては、蛇は神聖なる存在だと考えられてきた。『山海經』では、天地創造の創世神である盤古と女娲が人面蛇身で描かれている。一方、日本において、蛇と関わりがあるのは、八岐大蛇退治神話、三輪山伝説・賀茂神話など数多く、蛇との交婚譚や蛇を祖神とする話が多い。また、大地母神、豊饒神が蛇神と結びつくことは、蛇がもたらす不死と再生の観念から容易に考えられるだろう。

こうした内容から見ると、中国と日本における蛇に対するイメージは神聖性を持つ蛇神という概念であるが、文学作品においては

登場する蛇はどのように描かれているだろうか。

本論は、日本と中国における異類婚姻譚の歴史と類型を出発点として、馮夢龍「白娘子永鎮雷峰塔」（一六一四年）、上田秋成「蛇性の姪」（一七七六年）、中上健次『蛇淫』（一九七六年）を取り入げ、これらの物語の中での異類と人間との関係性の分析から、女性たちが異類として描かれる意味や役割を考察したい。そして、それぞれの作品の中に「蛇」のイメージは神聖または邪悪的な存在だとみなされるだろうか。さらに、三作の関連性と共通点、相違点を検討しておきたい。これらの物語の発展と変容には、当時の社会背景と宗教信仰の影響があり、ジェンダー役割や性差別などの問題が見てとれる。

キーワード：蛇、『蛇淫』、異類婚姻譚、『白娘子永鎮雷峰塔』

『古事記』「秋山・春山の神」神話における母神の靈力

フェリス女学院大学大学院生 宮澤 千鶴

『古事記』中巻に収載される、秋山之下水壯夫と春山之霞壯夫の神話において、その母神は、一方では春山の神の婚姻に助力を与え、他方、秋山の神に対し枯れさせるという呪詛を与えている。本発表は、この神話における母神の靈力がいかなるものであつたかを解き明かすことを目的とする。

従来の諸論では、母神が春山の神に与えた藤布の衣服が「藤の花に成」つた点、あるいはまた、呪詛された秋山の神が「病み枯れる」点に注目しつつ、母神の神格・靈力は、「大地の母神と死の女神」「死から再生」であるとされてきた。

しかし、母神の行為には死そのものは一切描かれていないこと

には注意が必要であろう。

そこで、ここでは母神がその靈力を發揮する際に用いた呪具の描かれ方を考察の対象として、その神格・靈力のありようを明らかにしたい。

母神が春山の神に与えた藤布の衣服は花を咲かせる。藤の開花時期が夏であることに鑑みると、ここには春から夏へという時間の推移の性質が付与されたことがうかがえる。対する秋山の神に對して用いられた呪具の「竹」「塩」は、それぞれ「青み萎え」・「満ち干し」という呪詛のことばをもつてその靈力が発動するが、これもまた、竹の葉の季節による色の変化・潮の満ち引きを示すことばであり、これが時間の推移の性質の付与という呪詛であつたと確認できる。秋山の神に時間の推移が与えられたために、秋山の神は「病み枯れ」という冬の状態となつたのである。

よって、母神の神格・靈力とは、息子の持つ永遠の春・秋に対して、時間の推移の性質を付与するものであつたということがで

きる。

最後に、上記の考察結果を踏まえて、当該神話が新羅から來訪した神の一族である伊豆志袁登を娶るものである点に注目しつつ、これを『古事記』が語る神功・応神記の一連の歴史の中に位置付けるべきことを展望として述べることとしたい。

『今昔物語集』における孝養思想

徳島大学外国人研究員 韓 春 紅

一一二〇年以後成立した『今昔物語集』は平安時代において集成した説話集であり、後の説話文学に影響を与え、更に、周知

の通り、芥川龍之介もそれに題材を取つて有名な『羅生門』『芋粥』『藪の中』や『地獄變』を創作した。

『今昔物語集』は天竺・震旦・本朝の三部に分かれているが、本発表においては、テキスト分析法及び歴史学研究法によつて、主に本朝部をめぐつて検討を行なう。本朝部の説話はあらゆる地域と階層の人間が登場し、生き生きした人間性が描かれるにされてるので、作品中に現れた孝養思想及びその本質を究明する。

まずはテキスト解読を通じて、『今昔物語集』における親孝行の類型を、それぞれ実例を挙げながら、発表者なりに「現世孝養型・死後追慕型・仏教供養型」と纏める。

次には、親への孝養による因果応報を論じる。結論的に言うと、孝養であるなら、善報を受けるが、不孝であるなら、惡報を受けようということになつてゐる。というわけで、日本の平安時代の孝養思想が仏教思想と深く結び付いていることも明らかになる。

また、『今昔物語集』における親による無償の愛について、考察を試みる。『今昔物語集』では、親が子を可愛がつたり、救助したりする説話もいくつか描かれた。そこから、一方的に子の親孝行が要求されるわけではなく、親の子に対する感情も求められているということが分かる。

最後には、『今昔物語集』における孝養思想を探究する。「孝行のしたい時に親はなし」と言われているが、不義非道な親に従うべからずという理も重んじられた。一方、「親思う心にまさる親心」とはいえ、悪事に執念を燃やした子を断じて許さぬ正義なる親の存在も決して軽んじることはできない。また、我が身を心配したがために、子を切り捨てる自己優先なる親もいたのである。

源氏物語における「春や昔の春ならぬ」引用

—早蕨・手習卷の自然表現—

明治大学大学院生 関 恭平

源氏物語において、「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして（古今集・恋五・業平／伊勢物語四段）」が早蕨・手習卷にて引用されている。早蕨卷では、亡くなつた大君を妹・中の君と薰とが偲ぶ場面において、手習卷では、浮舟が小野の地で昔を思う場面において、ともに、姿を消した恋人を追慕するこの歌が引かれる。

「春や昔の」の引用については、これまで各卷毎の考察が主としてなされてきた。早蕨卷においては薰と中の君の関係性が、手習卷では浮舟が抱く男君への思いのあり方が考察の観点となつてゐる。本発表では各卷毎ではなく、両巻を比較して考察する。

この両巻での引用は、「自然の景物を契機として追慕される過去」がテーマとなつており、三者のありようを比較することで、自然表現が人物の問題どどのように結びついているのか、その一端を明らかにできると考へたためである。

早蕨・手習卷とともに、引き歌の周辺には、春の訪れによる季節の循環が人物の追慕を喚起する表現と、その人物の孤独を浮き彫りにする表現とが配されている。これらの表現はこれまで個別でなされており、同時に用いられるることはなかつた。「春や昔の」は、源氏物語が繰り返し用いていたこの二つの表現を結合させるものであり、季節の循環の中で孤立を深めていくという、「春や昔の」引用に特有の自然と人物の関係性をつくり出している。そして、早蕨卷においてこの歌は、ともに哀傷する薰と中の君との間に連帶を生じさせると同時に、姉の死を深く認識する中の君と、

その死を認めずに形代を求める薰との間に亀裂を潜在させる。一方で手習卷においては、男君への思いを断ちきろうとする意志に反するよう、浮舟に過去への思慕を募らせ、恋情による苦悩が繰り返されることを予感させるのである。

『源氏物語』「若菜下」巻 龐月夜の最後の手紙

國學院大學大学院生 小菅あすか

「若菜下」巻には、龐月夜から光源氏への最後の手紙が描かれる。その文面には「あま舟にいかがは思ひおくれけむ明石の浦にいさりせし君」という和歌や出家者の行う「回向」について書かれ、形式には「濃き青鈍の紙」や「檣」の折枝が用いられている。従来、この手紙については「若菜下」巻の中でどのように位置づけられるのか、光源氏への皮肉が込められたものであつたか否かなど多くの考証がなされている。しかし、そこに込められた龐月夜の心情を、光源氏からの視点ではなく、あくまで手紙に即して理解しようとした研究はそれほど多くない。そこで本発表では、文面や形式の分析をとおして、今一度、手紙に込められた龐月夜の最後の心情を明らかにする。

龐月夜は、この手紙を「御文のとぢめ」という認識のもとで書いている。従来の研究では、ここに出家者としての自身の立場や光源氏との恋の終焉を読む。しかし、物語上では他の「とぢめ」の手紙が、遺書や臨終の際の手紙として描かれていることは見過せない。まず、この点を考慮し龐月夜の心情を再考する。

また、手紙の中で詠まれた和歌は、自身の出家に対し後れをとつた光源氏を責める意と解釈されてきた。しかし、龐月夜の

「あま舟」という表現によつて浮かび上るのは、自身もまた不安定な身であるという朧月夜の抱える苦悩である。そこには出家を果たせずにいる光源氏の受け止め方との差異が見られる。

さらに、この手紙に用いられている料紙や折枝は、出家者による常套の形式とされてきたが、「檣」の折枝については他に例が見られない。つまり、朧月夜は何らかの意図をもつてこの形式を選び取つたのである。「檣」の持つ薰りは、手紙の文面に見られる光源氏の救いを祈る回向の発想と関わる。

以上の分析をとおして、朧月夜の手紙には出家を果たしてもなお救われぬ身や、それでも光源氏の救いを祈る朧月夜の最後の心情が込められていたことを論じる。

橋守国の大坂絵手本作品における和漢分類意識

—レイアウトを起点に—

総合研究大学院大学大学院生　古明地　樹

本発表では、近世中期の大坂で活躍した橋守国（延宝七（一六七九）年—寛延元（一七四八）年）の絵手本を、レイアウトに着目して分析する。その結果、守国による和漢の故事理解が版本レイアウトに表れていることを指摘し、守国の画題に対する注釈的意識の一端を明らかにすることとする。

絵師の画業には、絵を描く際の手本となる粉本の存在が不可欠だが、本来粉本は各流派内で秘蔵されるものであった。しかし近世になると、町絵師や浮世絵師が登場し、自らの作画の手本とするため、粉本を求めることになる。近世中期、その需要に答える

ように、絵手本や画譜といった版本が刊行された。それらは和漢の故事や花鳥画、山水画などの画題を掲載し、粉本として用いられた。

橋守国は、その絵手本流行の最初期を代表する絵師である。狩野探幽の弟子、鶴澤探山に学んだ狩野派の絵師であり、絵手本を多く作成した。その影響は鈴木春信ら浮世絵師にも及び、作品は明治まで繰り返し版行されている。それら守国作品に共通する特徴として、絵画に対し説明文を付す、絵画と文を伴う形式が挙げられる。

本研究では、この絵画と文の配置に着目して『絵本写宝袋』等の守国作品、及び周辺絵師による絵手本を収集し、分析と比較を行つた。その結果、守国画作の作品において、守国は画題における和漢の別をレイアウトのレベルで強く意識していることが判明した。和画題には雲形郭線、上文下図形式、漢画題には上図下文形式などと、その画題に合わせたレイアウトが意識的に採用されていたのである。これらのレイアウトは、先行する絵巻や奈良絵本、舶載の漢籍類を元にしたと推測される。

守国による画題の分類は、狩野派絵師として行われた可能性がある。このことは、守国が扱う画題分析により、文学の領域から行う狩野派研究の可能性を示唆する。文学と美術史を繋ぐ守国研究の重要性の一端を明らかにする。

【研究発表会・B会場】

尾崎紅葉の日記・旅行記・闘病記

—『十千万堂日録』と「修善寺行」「病骨録」「病間記」との関連から—

中央学院大学専任講師 高橋 茂美

尾崎紅葉の『十千万堂日録』（明治41年10月25日、左久良書房）ほど多くの情報が詰め込まれている日記はないだろう。この日記が紅葉の交友録と評される所以である。しかし、『十千万堂日録』には、文学者としての紅葉と自身の胃病を案ずる紅葉という二つの顔が見られる。それは、この日記が単なる交友録ではないことを表している。

そこで、『十千万堂日録』の中の欠落部分に注目する。紅葉は胃病の療養のため、明治三十四年五月六日から十六日まで伊豆修善寺に滞在するが、この間の記述が『十千万堂日録』には見られず、のちに「修善寺行」（明治44年4月20日、『紅葉遺稿』、博信堂書房）という、自作の俳句を織り交ぜた紀行文として執筆される。これは、紀行文の伝統を踏まえて現実に即した詩情を表現した旅行記である。また、『十千万堂日録』における自身の胃病との闘いについての記述は、日記というより隨筆とも言える「病骨録」（明治37年3月1日、巖谷小波編『病骨録』、文禄堂に収録）や「病間記」（明治44年4月20日、『紅葉遺稿』、博信堂書房）などによる詳細な記述によって、当時の紅葉の病状や心境が補完されている。紅葉の日記と旅行記、闘病記との関わりは、自らの文學に対するジャンル意識と無関係ではない。

本発表では、『十千万堂日録』と「修善寺行」「病骨録」「病間記」などの関連を考察しながら、紅葉の日記と隨筆との関わりを

明瞭にする。紅葉は、日々の出来事や心境を淡々と記述する日記から、詩情や心境を詳述する旅行記や闘病記へと向かつたと言える。特に後者においては、硯友社同人の巖谷小波の編集によつて、闘病記という紅葉文学の新しいジャンルを誕生させることとなつた。紅葉の旅行記や闘病記が、〈女物語〉の作者だけではない紅葉の新たな人物像を、外部に向けて発信することになつたのである。

時間、この不思議なるものの文学

—中島敦「木乃伊」論—

渋谷教育学園幕張中高等学校特任教諭 石井 要

中島敦文学は、作者の伝記的事実や漢学の素養を背景にして、「山月記」や「李陵」が評価されてきた。しかし、中島敦が学んでいた同時代の物理学に注目し、中島敦文学に従来とは異なる評価軸を提示したい。

本発表では、短編「木乃伊」（『光と風と夢』筑摩書房、一九四二・七）を論じる。この作品には、物語世界の時空間表象に科学的な想像力が見られる。「木乃伊」は、パリスカスが前世の自己と遭遇し、無限に過去へと逆行することで発狂する物語であり、先行論では、作者の存在論的な不安が反映された小説と読まれてきた。そのため、作中の不思議な現象は不条理性の象徴や、主人公の妄想とされ、その想像力の広がりが見過されてきた。そこで、「木乃伊」の語りの構造とその時空間表象を分析し、そこに活か

された物理学の知見を考察することで、作品の意義を明らかにしたい。

「木乃伊」の語りは、俯瞰的な位置から物語を展開する語り手の現実認識と、登場人物の主観が、自由間接話法によつて混同される形式を持つ。そのことによつて現実と観念の境界が曖昧になつた物語世界で、パリスカスが空間化した時間や円環的な時間に驚異する様子が語られる。「木乃伊」は、パリスカスが時空間を移動し、複数の時間軸を生きる物語なのだ。現代物理学では、時間という不可視の次元を三次元世界に組み込んだ四次元連続体を理論化した。それは、相対性理論をはじめ、物理現象を枠づける客観的な時空間構造が問い合わせられる状況に対応した概念だ。「木乃伊」の語りがもたらす認識の不安定さは、こうした現実とも観念ともつかないような概念を取り入れる手法といえる。

「木乃伊」から一時代前のモダニズム文学は、最先端の物理学を小説に取り入れていた。中島敦文学は、その「前衛的な」姿勢をモダニズムの時代から引き継いでいる。なかでも「木乃伊」は、科学理論を踏まえた「時間の想像力」を拡張するSF作品として評価できるのである。

太宰治「走れメロス」論 —〈信じる〉ということ—

明治大学大学院生 尾山 真麻

本発表は、太宰治の「走れメロス」を、〈信じる〉ということに着目して読み解くものである。

本文末尾に「(古伝説と、シルレルの詩から。)」とあるように、

「走れメロス」はシラー (Friedrich von Schiller) の「Die Burgschaft」を元にした短編小説である。この二作を比較すると、太宰が「走れメロス」の中で〈王ディオニスが暴君に変貌した経緯〉を付加していることが分かる。その詳細は描かれていないが、王が〈はじめに殺した人物〉と〈殺していく順番〉から、二年前に王が信じていた人物に裏切られたこと、王を裏切ったのは妹婿、であると推測した。(王が血の繋がらない妹婿に裏切られたことは、メロスとセリヌンティウスという血の繋がらない二人を見て改心する結末にも繋がっている。) 王が抱えていた「人を、信ずる事が出来ぬ」という問題は非常に重要であり、このことから「走れメロス」は〈信じる〉ということを軸に構成されていると考えられる。

先行研究では、「悪い夢」について論じるものが多く見られた。この「悪い夢」については、メロスがシラクスの市へ戻ることを諦めようとしたこと、つまりメロスが「どうとも、勝手にするがよい」と「四肢を投げ出」したことであると解釈する論文が多い。しかし、メロスが言う「悪い夢」とは、セリヌンティウスを〈疑つた〉ことではないだろうか。メロスがセリヌンティウスを〈疑つた〉ことが「悪い夢」であると定義すると、王の「人を、信ずる事が出来ぬ」という問題と重なつて、「走れメロス」の〈信じる〉という軸が更にはつきりと浮かび上がつてくる。こうして読むことで、先行研究で作品の欠点や矛盾点であると指摘されてきたものの多くは否定できるのである。

先行研究が非常に多く、そのため複雑な考察や解釈が多く提示されてきた「走れメロス」であるが、本発表では〈信じる〉ということに着目することで、明快に読める作品であることを提示したい。

『仮面の告白』の出版戦略 —河出書房と三島由紀夫の関係から—

立教新座中学校高等学校教諭 本橋 龍晃

三島由紀夫の代表作とされる『仮面の告白』（河出書房、一九四九・七）は、同性愛を書く作家としての〈三島由紀夫〉像成立の端緒と見なされてきた。同作はテクストと作者及び文壇との関係ばかりが注目されたが、こうした現状で見過ごされているのは、三島に執筆を依頼した河出書房の果たした役割である。本発表では、『仮面の告白』執筆によつて変容する〈三島由紀夫〉像に、河出書房の出版戦略や編集方針がどのように影響したか明らかにする。

河出書房は戦後派の新人发掘を企図しており、雑誌への新人起用と書き下ろし長編シリーズの二つを中心にしていた。雑誌『序曲』の同人となり、書き下ろし長編の依頼を受けた三島は、文壇への意識から『仮面の告白』を構想する。書き下ろし長編シリーズは戦後の新文学待望の要請に応える作品を輩出しようとしており、新人の戦後派作家の一人として三島が選ばれ、市場に新たな〈三島由起夫〉像が拡大する契機となる。

発表前に『仮面の告白』の広告を掲載していたのは『近代文学』のみで、それまで発表した作品名と「鬼才」とされる「作者の言葉」が記載されており、文学に精通した読者が想定されていた。一九四九年一二月に「読売ベストスリー」に選出されてから、広告の数も掲載メディアも増加する。他の作品名や「作者の言葉」は消え、「読売ベストスリー」の文字が強調される。こうして『仮面の告白』はそれまでの三島文学から切り離され、より広範囲の読者を想定した広告が付されるようになる。

自我の模索..遠藤周作『沈黙』から見る

明治大学大学院生 董 春玲

一九六六年三月に新潮社より刊行された遠藤周作の書き下ろし長編『沈黙』は、江戸時代初期の切支丹弾圧の歴史を物語る作品である。先行研究の中で、キリスト教の枠内で東西の文化衝突・弱者の救済・神のあり方をめぐつて、日本におけるイエズス会の布教から切支丹弾圧時代までの歴史や作品の典拠、文体あるいは翻訳の問題を研究するものがあるが、『海と毒薬』などの先行作品との関連で、集団や権力対個人の角度からアプローチするのは見当たらない。

九州大学生体解剖事件をとりあげた『海と毒薬』では、アメリカ人捕虜に害を加えた同事件の関係者は、同時に絶対的な天皇制日本社会の被害者でもある。そして、肺結核のため入院していた遠藤は、一九六〇年の「安保闘争」を意識して、「集団に対する不信感」というエッセイを書き、「安保闘争」のやり方に疑問を呈した。まつたく無関係に見える戦時中と「安保闘争」だが、両者の中に潜む個人の存在の在り方に、遠藤が注目していく。個人の総和である集団は、「安保闘争」のように、共通の目標に向かい、

『仮面の告白』以前は、新たな文学が求められた時代ゆえに、「売れる」可能性のある有望な「新人」という〈三島由起夫〉像が形成されていた。だが、「読売ベストスリー」選出によって、『仮面の告白』を書いた三島由紀夫」という作家像へと転換していく。現代にまで続く〈三島由紀夫〉像とは、メディアが求めた「売れる」作家像と販売戦略のなかで生成されたのである。

多くの力を結集できる一方、戦時中のように、はみ出した個人を圧迫する危険性もはらんでいる。現に戦時中の遠藤はクリスチヤンであるゆえ、非国民と罵られていた。

『沈黙』では、師フェレイラの棄教を確かめるべく、ポルトガルから日本に辿り着いたロドリゴは、結局フェレイラと同じように、拷問される信者を救うべく、自ら踏み絵を踏むことを選んだ。外側の強権に屈服しても、なおも内側の自我を堅持する可能性を探るロドリゴの表象は、権力対個人、個人の外側対内面の自我の緊張関係についての遠藤の模索とも考えられる。それは政治や社会を切り離した「文学」のなかに閉じこもつていく志向ではなく、厳しい政治的・社会的状況の中で如何に自我を確立していくかを模索するものであろう。

ゆえに本作は、評価を大きく二分してきた。かつて『枯木灘』を評価してきた論者がその評価基準をもとに批判的に評価を下す一方で、柄谷行人や四方田犬彦等が本作へ至る秋幸三部作の歩みを「脱構築」的な過程として「現代思想」的な文脈で高く評価するという二極化が起こっている。しかし、それは本作を『枯木灘』の「続編」という通時的な文脈で評価するのみであり、本作自体の共時的な文脈に関してはいまだ議論がなされているとはいえない。

そこで本発表では、本作及び本作に対する批評に「現代思想」的文脈が浸透しているように、同時代の思想・批評的コンテキストを分析の射程に含んでいく。その作業のもとで先行論において自明の枠組みとなつている「秋幸三部作」という枠組みをいつたん解除し、『地の果て 至上の時』というテクスト自体の内的論理を抽出していくことで、本作を新たな読解に開くことをを目指したい。

中上健次『地の果て 至上の時』（一九八三年）は、「岬」（一九七五年）『枯木灘』（一九七七年）に続く、中上健次の秋幸三部作の第三作目である。『地の果て 至上の時』は、『枯木灘』で異母弟を殺害した秋幸が出所後の時代を舞台に、様々な人物やエピソードを交錯させながら、これまでの作品で魅力的に描かれてきた「路地」の崩壊、そして秋幸の実父である浜村龍造の自死を描く。

しかし、本作は評価を問題的な作品としても知られている。前述したように「路地」の崩壊それ自身をテーマに繰り込んだ本作は、『枯木灘』の単なる「続編」と見なすことができない切斷が

明治大学駿河台キャンパス キャンパスマップ



明治大学駿河台キャンパス・懇親会会場

案内図

JR 御茶ノ水駅より
徒歩5分

千代田線
新御茶ノ水駅より
徒歩5分

都営線／半蔵門線
神保町駅より
徒歩5分

